

メッセージ「光る 光る すべては光る」

牛田 匡 牧師

聖書 エフェソの信徒への手紙 5章7-20節

今週は久しぶりに雨が降りましたが、雨が降るたびに「警報」が出されるような土砂降りの大雨で、驚かされています。今も大型で非常に強い台風10号が、九州地方を通過しようとしています。7月に引き続きこれ以上、大きな被害が出ないことを祈ります。

カレンダーを見ると、早くも9月になりました。昼間は残暑が厳しいと言っても、朝晩には虫の声が聞かれるようになりまし、陽が落ちるのも早くなって来て、秋がやって来ていることを感じます。とは言え、私自身の中では今年はコロナが拵がって来た3月の頃から、何だか時間の感覚がおかしくなっていて、実際の季節に体と気持ちとが追いついていないような感覚がしています。それは例年であれば、普通に行って来ていた様々な季節の行事が行われない、ということもあるのかもしれませんが。これまで普通だと思っていたことが、普通ではなくなる。出来ていたことが出来なくなる、ということに対する無言のストレスが、無意識のうちに溜まっているのかもしれませんが。皆様は如何でしょうか。

日本の社会全体を見ると、コロナウイルスの影響によって、非正規職員の方々を中心に解雇や雇止めが相次ぎ、失業者数が増加していると報じられていました。12年前のリーマンショックの時も、半年から1年後にかけて、企業の倒産や失業者が急増しましたから、今回もこれから半年程の間に経済社会は大きく変化していくのではないかと心配されます。その一方で、医療関係者の方々の話では、依然としてコロナが去ったわけではなく、発症して突然、重症化する人もいるので、決して気が抜けないとのことでした。

なかなか明るい話題が見出しにくい毎日ですが、そのような中で、私たちはどのように歩いて行くことができるのでしょうか。聖書の言葉に聞いてみたいと思います。

今回の聖書の箇所は『エフェソの信徒への手紙』の一節でした。7節の「光の子として歩みなさい」という言葉は、保育園の卒園式で毎年、卒園していく子どもたちに贈られる言葉です。4月になったら、ピカピカのランドセルを背負って、目をキラキラと輝かせて、小学校に行く子どもたちの姿は、確かに「光の子ども」のようです。とは言え、この「光の子として歩みなさい」という言葉は、一体何を言っているのでしょうか。

『エフェソの信徒への手紙』は、『ローマの信徒への手紙』や『コリントの信徒への手紙』のように、パウロがエフェソの町にある教会の人々に宛てて書いた手紙だと、長年思われて来ていましたが、近年ではパウロの弟子たちによって、エフェソに限らず広く各地の教会で読まれるように書かれた文章だと考えられています。そのために個人名を挙げて具体的な問題について論じているのではなく、どこの教会にも当てはまるような広く一般的な話題が多く書かれています。

7節からですが、「彼らの仲間になってはなりません」。この「彼ら」というのは、その後を読むと分かりますが、「闇」の中にいる人々のことです。そして8節では「あなたがたは以前は闇でしたが、今は主にあって光となっています。光の子として歩みなさい」と続きます。ここから分かるのは、この手紙を読む人々、教会に連なる人々は主と一体になったものとして光であり、光の子、闇の中にあって光を放つ存在であるということです。9節には、「光の結ぶ実は、あらゆる善と義と真理との内にある」とあります。「善」とは他人に対して自分事として親身になって関わること、「正義」とは抑圧されている所から解放されるように働くこと、そして「真理」とは真実なことです。逆に言えば、「闇の中にはそれがない」ということでしょう。

16節には「今は悪い時代だからです」とあります。聖書で言われている「悪」とは、他人を抑圧することですが、この手紙が記された紀元1世紀の地中海世界は、現代以上に、差別と格差、抑圧に満ちた世界でした。それぞれの町で、多少の違いはあったでしょうが、上に立つ人がいて、虐げられる人々がいました。そして教会にはそのような社会の中で弱く小さくされ、居場所が与えられなかった人々が集まり、そこで自分たちが生きる意義を見出し、自分たちが解放されて自分の命を生きられる居場所を作り出していました。

14節で引用されている言葉は、如何にもヘブライ語聖書からの引用に思われますが、この言葉はヘブライ語聖書の中にはありません。恐らくは最初期の教会の中で歌われていた賛美歌、とりわけ教会のメンバーに加わる際の洗礼の時の歌ではないかと考えられています。「眠っている者よ、起きよ。死者の中から立ち上がれ」とは、イエス様の「復活」と同じ言葉です。この苦難と抑圧に満ちた闇の中で、多く的人是は死んでいます……。現代でも、「身体は生きていても、霊は死んでいる」……。それこそ仕事に「忙殺」されていたり、お金の「亡者」になっていたりする、ということがあるかと思えます。そのような死の力の中から、キリストと共に立ち上がり、解放されて本当の命を生きるようになる……。それが紀元1世紀の頃の最初期の教会の姿でした。

19節にある「互いに詩と賛歌と霊の歌を唱え、主に向かって心から歌い、また賛美しなさい」という言葉も、その当時の教会での礼拝、集会の様子を表しています。保育園の小さな子どもたちは、字が読めなくても歌は上手に覚えて歌います。それ

と同じように、当時の教会の人々も文字の読み書きは出来ませんでしたし、また紙も書物も非常に高価な時代でしたから、教会では聖書のお話を口伝えで聞いたり、時々回覧されたものを読める人が読み聞かせたりして、その他は皆で賛美歌を歌い、お祈りをしていたようです。皆で集まって賛美歌を歌い、聖書のお話を聞いてお祈りをする。そして持ち寄った食事を感謝して皆で分かち合って頂く。それが最初期の教会で行われていた礼拝のあり方でした。差別と抑圧に満ちた暗い世の中であって、そのようにお互いが解放されてホッと一息をつける場所は、まさに光に満ちた時間と空間だったのではないかと思います。

さて、今日、私たちはそのような教会の歴史の上に立ち、「光の子ども」「光を放つ者」として歩めているのでしょうか。暗い出口の見えない重苦しいような時代の中であって、ともすると「自分はとても、光を放つ人になんてなれない」と思ってしまいます。確かに、周りを見回してみると、このような時代の中でも、バリバリと周囲の人々を引っ張って、時代を切り拓きリードしている人がいます。そのような人は、如何にもキラキラと輝いているように思い、自分との違いを感じます。やはり光を放てる人と、光を放てない人がいる……のでしょうか。

今日はメッセージの題を「光る、光る、すべては光る」としましたが、これは坂村真民さんの詩の言葉です。

光る 光る すべては光る
光らないものは ひとつとしてない
みずから 光らないものは
他から 光を受けて 光る

先日9月3日は満月でしたが、考えて見れば暗い夜空に白く輝く月も、自ら光っているわけではありません。それでも夜の闇が深ければ深い程、月は明るく輝きます。「光の子として歩みなさい」「光を放つ人になりなさい」……。そのように言われる時、実は私たちは自ら光り輝くことを求められているのではなく、神様と共にあって、神様からの光を受けて、光ることが出来るのではないのでしょうか。

だから、私たちは自分の力の多い少ないに一喜一憂するのではなく、隣の芝生の青さを気にかけることもなく、安心して神様によって用いられていきたいと思えます。教会はその最初期から、時間もお金も、そして力もない人たちの集まりでした。足りないだらけの人たちの集まりの中に、神様が共にいて下さって、補い合って余りある共同体として用いて下さいました。

今、この時代の中で、私たちに求められていること、私たちが為すべきことは何でしょうか。神様からの光を頂きながら、私たちは今日もここから用いられて行きます。